

浄

monthly JÔDO

土

2015
November

11



2015年 浄土「表紙」

メルヘン

南 初枝 の 作品

陶芸家

メルヘンとはドイツで誕生した空想の物語の謂である。英語圏ではフェアリーテイル、仏語圏ではコント。日本で言えば、おとぎばなし、となろうか。口承民話そのものや、それをもとにした創作。

さて、作品は、中世ヨーロッパの農村風景を思わせる、小さな塔。優しい曲線と色彩。まさにメルヘンの世界である。ここには登場しないが、たとえば人語を解する動物たち、魔法使い、そして妖精たちが生き生きとして暮らすさまが見えてくるようだ。

この塔は中央から上が蓋のようになっており、中は空洞。玄関に置く印鑑入れなどの実用にも供する、という。

ぼつりぼつりと小屋。納屋のようでもあり、街の集会場にも見える。素朴であるにもかかわらず、無限の空想を飛ばすこともできる。ここから作者特有の童話がはじまる。

撮影・芝崎慶三

浄土

2015/11月号 目次

連載 法然上人のお言葉⑬	梶村 昇	英訳 河西良治	2
現代に生きる法然上人②	梶村 昇 + 阿満利麿		4
連載 会いたい人 藤間勘十郎さん②	関 容子		14
連載 響流十方	小村正孝		22
連載 東日本大震災の被災地を訪れて⑦	成田淳教		26
連載 友好の絆 2 ④	森 清鑑		30
連載小説 渡辺海旭⑬	前田和男		36
連載 誌上句会	選者＝増田河郎子		44
連載 マンガ さっちゃんはネッ	かまちよしろう		47
編集後記			48

表紙・陶芸家 南初枝の作品

表紙裏＝表紙の言葉



表紙題字＝中村康隆元浄土門主
 アートディレクション＝近藤十四郎
 協力＝迦陵頻伽舎

ご法語

洛陽らくようの月卿げつけい雲客うんかくの帰依きいは年久ひさし敷く、辺鄙へんびの田夫でんぶ野人やじんの化け導どうは日浅し。是れ則ち年来の本懐なりしか共、時いまだいたらざれば、思いながら年月をおくる所に、此の時年来の本意を遂げぬる事併しながら朝恩なり

(讃岐在国の間、門弟に示されける御詞)

現代語訳―都の高位高官の人々の念仏への帰依は、年久しくなるが、都を離れた田舎の人々への布教は日が浅い。これは年来の望みであったが、その時がまだ来ないのだと思いつながら年月を送っていたところに、このたび年来の望みが達せられることになった。なんとといっても朝廷のご恩である。

Honen Shonin's Sayings

High-ranking court nobles in the capital have become believers in the nembutsu these many years. But our mission to people in the countries away from the capital has been carried out for only a very short time. This mission has been my long-cherished hope, but years have gone by while I thought that the time would not have come yet. This time, however, the hope has at last been realized. I feel myself indebted to the Imperial Court for this benevolence.

(The words Honen said to his disciples during his stay in Sanuki District)

Commentary

This quotes the words that Honen, 75 years of age, uttered in February of Ken-ei 2 (1207) when he was exiled to Shikoku for his disciples's sins and his crime of recommending the "senju

解説

これは建永二年（1207）二月、七十五歳の法然上人が、弟子の罪と、専修念仏勸化の罪で、四国に流罪になった時の言葉です。普通こういう時は、身の不運を嘆くものですが、上人はこれを地方教化の機会を与えられたものとして「朝恩」と受け取っております。人間はみんな、なるようになっていくものですが、それをどう受け取るか、上人が身をもつて示されたもののように思います。

この流罪の時、上人は一人の弟子に、一向専修の義を説きます。すると他の弟子が、その義が流罪の原因になったのですから、と慌てて止めにかかりますが、上人は「たとえ死刑になっても、これは言わなければならない」と言われたといひます。誰に、何を説かれたのか、記録は残っておりません。

記録といえは、この事件は当時の一般の文書には、何も記されておりません。僧侶が死罪や配流になったという事件ですから、記録するだけでも祟りがあると怖がられたのでしょうか。歴史の闇といふのは、こうして作られていくのかと思つたことです。

nembutsu" (i.e., the nembutsu selected as the only practice for salvation). In such a situation it would be common for a person concerned to deplore his misfortune, but Honen accepted it as the Imperial Court's benevolence because he thought he was given the opportunity to enlighten people in the countries. All humans cannot help accepting their own courses in life, but it is important how they do so. I think that Honen provided an example by his own action.

During the period of this exile, Honen preached to one of his disciples about the significance of the nembutsu of "ikkou senju" (i.e., the nembutsu selected as the only single-minded practice for salvation). At that time another disciple tried to stop his preaching in a panic, saying that this significance itself had become a reason for his exile, but Honen is said to have answered, "Even if I am executed, I have to make this statement". There have been no documents remaining which show what he preached to whom.

As to its recording, no general documents of those days had any descriptions of it. Considering that this was an event in which priests were executed or exiled, record keepers of those days might have feared that even its recording alone would lay curses on them later on. I thought that this was how some true facts in history would disappear into darkness.

梶村昇

亜細亜大学名誉教授

法然上人鑽仰会講演会 平成二十七年六月十九日 於大本山増上寺

梶村昇

先生

対談

その二

阿満利磨

先生

法然上人

現代に
生きる

阿満 先生のお言葉の中で、最近出されました『法然上人伝』（大東出版社 上下二巻）の中に出ていました「未完了の世界に安住する」という、あの言葉が私は、大変素晴らしいと思います。

梶村 人間は皆、完了すること、完璧になることを望んでいます。しかし法然上人の教えは、人間は至らないものだというのが出発点です。

善人・悪人という言葉がある。今の感覚で善人・悪人と言いますと、大抵の人は、私は善人とは言えないけれど、悪人と言われてはちよつとという言い方をします。しかし法然上人のおっしゃる善人は、仏教は戒律を守り、心を定める、そして真理を極めるという「戒・定・慧」の三字ができる人です。当時の比叡山仏教、日本の仏教はそうでした。

ところが、戒律を守れと言われても、生き物を殺すなという最初の戒律でさえ誰も守れないのではないですか。法然上人はそのことをおっしゃった。「戒・定・慧」の三字を守れる人が善人で、守り切れない人が悪人です。

そうすると、仏教の教えを守り切れる世界が完了の世界です。ところが、我々は守りきれない。法然上人はそうおっしゃられた。私もそのとおりだと思います。守り切れません。それが未完了の世界です。そのときに、人間の力を超えた大いなるもの、その大いなるものに救われるという、それが他力だと思います。

未完了の世界に安住するというのは、人間は自分の力ではできないけれども、人間を超えた大いなるもの、先ほどおっしゃられた阿弥陀仏の物語です。その阿弥陀仏の世界に任せし切る。それが未完了の世界に安住することではないでしょうか。そのように

思います。

阿満 「未完了に安住する」という先生のお言葉を読みまして、私はかねて、我々が歩む仏道は「曇天の仏道」だと思っていました。同じことをおっしゃってくださいっているのだろうと。曇天は、晴天ではない。しかし真つ暗闇でもない。曇りです。

なぜ我々の歩む仏道、我々の人生は晴天ではないのか。それは我々が煩惱の塊だからです。煩惱の自身は自己中心ということです。世界の中で自分を中心に見ているということから、どうしても逃れることはできない。そういうあり方をしている人間が念仏に出会ってかろうじて生きている。そういう人間からすれば、そんなにきれいに物事が完了したり、完成したりするわけがありません。僕たちの欲望は死ぬまで続くわけです。

例えば親鸞も、晩年になればなるほど、自分の中のすさまじい欲望の姿が見えてくる。

梶村昇（かじむらのぼる）

亜細亜大学名誉教授

主な著書

『法然上人とお弟子たち 乱世を生きる同信の世界』
（浄土宗 浄土選書 1998）

『法然の言葉だった「善人なをもて往生をとぐいはんや悪人をや」』（大東出版社 1999）

『法然上人をめぐる関東武者 3 津戸三郎為守』
（東方出版 2000）

『聖光と良忠 浄土宗三代の物語』
（浄土宗 浄土選書 2008）

『法然上人伝』
（大東出版社 2013）



見えてくると同時にそういう自分が念仏によつて救われていくという自信もまたはつきりしてくるわけです。

つまり親鸞にとつてもお念仏の暮らしは、晴天の中をすかつとした気持ちで歩めるようなものではなくて、逆に自分の中の煩惱が一段とはつきりと見えてくる。そういう生き方だと思ひます。

ですから、未完了とおっしゃった、私たちの人生は全て未完了です。若いときは、何か一つ、これを完成してと思つて頑張るわけですが、だんだん迫つてくると、碁で言えば指掛けです。あつちにも目がありこつちにも目がある。しかし、どれもこれもつながっていない。この勝負が付いたのか付かないのかわからないという状態でいよいよ目をつぶらなくてはならない。

これにどういうふうにな得するのかというときに、いや、そのまま指掛けのままでいいのでないですかという教えがあつたら、これはすごく助かります。それはきちんと寄せまですて、勝負を付けてから死ぬなんて言われたら、たまつたものではありません。

つまり法然上人の仏教は「凡夫の仏道」です。その凡夫の仏道の特徴としては、中途半端でよろしい。何も開き直るわけではない。下手をすると、開き直りに見えるかもしれないけれども、それを事実として受け止めるということです。

僕たちは自分のエゴが猛烈に肥大化していますから、何か物事を完了させたいという気持ちで絶えずあつて、実際は完了もしていないのに完了したと思いたがるわけです。そういう中で白黒を付けて生きていけるようなスーパーパーパワーのようなものが宗教だと思ふのは間違ひだつたと思ひます。

僕は、先生が未完了ということを大切にされているということで、もう一つ思うことがあります。法然上人のお弟子に禅勝房という方がおられる。この方は法然上人が七十歳ぐらいたったときに今の浜松あたりから法然上人の元に来られて、二年ほどおられて、故郷へ帰られた。

僕がこの禅勝房が好きなのは、そのあと、彼は大工さんをして生涯を終えようとした。お坊さんをやめ、大工さんをしていた。ところが法然上人のお弟子が関東のほうへ流されるということになって、下つていかれるときに、お会いになるということで禅勝房のことが歴史に残るようになったのでしょう。

梶村先生のご本によると、法然上人のたくさん残っている語録の中でも、三十何通が、禅勝房に宛てて残されたお手紙、あるいは語録だと言われています。あとでも少し話題にしますが、この禅勝房の生き方というときに、梶村先生は、我々の世俗の世界と宗教の世界とは一つの土俵の上にあるように見えるけれども、その間に大きな山があるとおっしゃいます。

世俗の普段の暮らしと、念仏の世界の間にそう簡単には行けない一つの大きな山がある。その大きな山は簡単に越えられない。しかし何とかそれを越えないことには念仏に出会うことはできないというようなことを書いておられます。

先ほどのお話を伺うと、先生は大きな山はとくに越えてしまつて、大きな海の中にまで入っておられる状態ですから、今更私がこういう質問をしてもお困りになるかもしれませんが、世俗の世界から念仏の世界、宗教の世界が隣り合わせだけでも、間に大きな山がある。大きな山をどういうふうに越えていったらいいだろうか。もう一度、我々のため

阿満利磨（あまとしまろ）

明治学院大学名誉教授

主な著書

『法然の衝撃 日本仏教のラディカル』

（人文書院 1989）

『仏教と日本人』

（ちくま新書 2007）

『選択本願念仏集－法然の教え』

（角川ソフィア文庫 2007）

『日本人はなぜ無宗教なのか』

（ちくま新書 1996）

『人はなぜ宗教を必要とするのか』

（ちくま新書 1999）

『法然を読む「選択本願念仏集」講義』

（角川学芸出版 1999）

『行動する仏教－法然・親鸞の教えを受けつぐ』

（ちくま学芸文庫 2011）

『法然入門』

（ちくま新書 2011）



にお教えいただければありがたいと思います。

梶村 大きな山がある。こちら側は、我々、凡夫の世界です。この山を越えると仏の世界です。ところが、この山がなかなか越えられない。なぜ越えられないかというと、凡夫は自分の知恵で、自分の頭でこの山を越えてやろう、この問題を解いてやろうと思うからです。

自分の力では越えられない、もうこりこりしたという境地を味わうべきではないでしょうか。私たちは何としても解ってやろうと思う。それが完了の世界です。

それを、ああ、もう越えられないとつくづく考える。なぜ越えられないかと言うと、我々の知恵で解決しようと思っっているからです。それが完了の世界だと思っています。ああ、

もうこりこりだと思ったときふっと山が越えられる。

法然上人はそれを味あわれた。それが大きな阿弥陀仏の力だと思われたのではないでしょう。阿弥陀様の力は、我々の知恵の及ばないことです。

『歎異抄』の有名な第一条、「弥陀の誓願、不思議に助け参らせて」。不思議とは「思議しないこと」。思議は自分の知恵で思い計ることです。自分の知恵で思い計れないことを不思議と言います。

例えば、このマイクをぼっと放すと落ちます。これは万有引力で不思議なことはありません。ところが、これが宙に上がってごらんない。人間の知恵では考えられないことです。それで不思議と言います。法然上人も阿弥陀様の不思議と度々おっしゃっておられます。自分の知恵でもって思議しようとしている世界で、それができないとわかったときに、思議できない不思議の世界にふっと入れるということではないかと思えます。

ところが私たちは横着なものですから、法然上人がそうおっしゃられたら、そのことを自分は体験しないで、結果だけ聞いているのです。ですから、なかなか阿弥陀仏の世界に身を任せることができない。

法然上人の『常に仰せられけるお言葉』を書いてきました。一番よく聞かれる言葉です。「生けらば念仏の功積り、死なば浄土へ参りなん。とてもかくてもこの身には思い煩うことぞなきと思ひぬれば死生ともに煩ひなし」

これは常に仰せられていたことです。「生きているときは念仏の功積り」、これは、念仏は貯金するようなものではありません。これだけ申したからこれだけ返してくれというのは、念仏ではないのです。

「念仏の功積り」というのは、こうしてお話しできていることが念仏です。人間これから先、お互いどうなるかわかりません。しかし確実に成ることがあります。それは成るようになるということですよ。成るようにしかならないということです。

これだけは確実です。確実に成るようになります。その成るように成る、確実に成ることを信ずれば、それは念仏です。だから、私の念仏は、成るように成る。そう思うことだ。それを言葉に出せば、南無阿弥陀仏だと思っています。

そういう「生けらば念仏の功積り」というのは、そう思って毎日、念仏を申して、毎日の生活をする。これが「生けらば念仏の功積り」です。

「死なば浄土へ参りなん」というのは、先ほど申しましたように、法然上人の時代は明日をも知れぬ世界です。ですから、浄土があるとおっしゃったと思います。それは今の時代にどう受け取ろうとかまわらない。そう信じられる人はそう信じなさい。そう信じられない人は信じなくてもよろしい。

だから、中曽根さんでも瀬戸内さんでも安岡さんでも、それぞれのように受け取ってもいいのです。受け取ってください。僕はそれしかしようがないと思います。今、これだけの人を、浄土宗から全部浄土へ行くのだと言って、統一できません。五十人いれば五十人、百人いれば百人全部、違っていると思います。法然上人がそうおっしゃっています。違っている。

『百四十五箇条問答』という法然上人の問答集があります。これは面白い本です。質問した人はお坊さんではない。一般の在家の女の方です。多分、私が思うには九条兼実の娘、後鳥羽天皇のお妃だろうと思います。そうは書いてないのですが。

要するに上流階級の女の人が、法然上人に当時の宗教のことを伺っているわけです。それに法然上人がきちつきちつと答えていらつしゃる。誠に面白い。その中の第一条にこういうのがあります。

「古き堂塔を修理して候はんをば、供養し候べきか」。古い堂塔があつた。それを直した。そのときに供養していいか悪いかということです。法然上人時代の、平安時代末の宗教はそういうことを気にしました。

新しい堂塔を建てれば供養する。これは質問するまでもないことです。しかし、古いのを修理したといつて、供養すべきか否かと尋ねている。

ところが法然上人のお答えがふるっています。「古き堂塔を修理して候はんは必ず供養すべきということも候はず」必ず供養しなさいということもない。「また供養し候はんも悪しきことに候はず」供養しても、それは悪いことではありませんよ。

「供養せねばとて罪を得る」ということではありませんと書いてある。法然上人の答えは、ああ、そっちでもいいよ、こっちでもいいよということで、必ずこうでなければならぬと決め付けない。

先ほど、安岡さんらの話をしましたが、皆、それぞれ自分の宗教でいいと思います。ただ、人間の力ではどうにもならない大きな力。何度も申しますが、それを法然上人は阿弥陀仏の力とおっしゃった。

私もそれは信じます。人間の力でどうにもなりません。今日ここでお話するというのは、私は予定してないわけです。そうではないでしょう。思わざることがあつて、こういうことになっている。

その思わざることというのは、阿弥陀仏の力です。法然上人はそれを南無阿弥陀仏と言った。中曽根さんは天上の星だと言った。瀬戸内さんはあの世はあると思っている。何とおっしゃってでもいいのです。

しかし人間を超えた大きな力は、事実、否定できないことだと思います。

阿満 今、先生がおっしゃったある種の寛容ということですが、私は法然上人の寛容というのは、法然上人が本願念仏一つを選択されたからと受け取っています。世界で何が一番大事かという一つを発見されたから、ほかのことはどうでもいいのです。ある意味ではどうでもいいのです。

ですから、法然上人の語録には「力及ばず候」という言葉がいっぱい出てきます。中曽根さんに、あなた、念仏しなさいと言ってするわけないでしょう。それは人それぞれであって、ただ、法然上人の寛容の根本に煩惱具足の凡愚が救われる道は念仏以外にないという選択がある。決断がある。だから、それだけ法然上人は寛容になっておられる。

しかし法然上人の狙いは、生を変え、死を変え、六道輪廻してでもまた念仏と出会う日があることを望んでおられる。その狙いを我々は受け継いでいたいと思います。

(つづく)

連載

会いたい人 関 容子

藤間勘十郎

さん

2



撮影／タカオカ邦彦

勘十郎さんは天王寺屋（中村富十郎）の引き立てを受けた恩恵をいつかきつと何かの形で返したい、と願っていた。その機会は、富十郎の子息鷹之資たかのすけを厳しく指導するときに訪れた。

「天王寺屋さんが晩年に授かった男の子ですから眼に入れても痛くないわけです。最後になった矢車会（自主公演）の演目も、鷹之資君のために立てられたようなもので、昼が『勧進帳』（弁慶は富十郎、富樫は吉右衛門、義経は鷹之資）、夜は親子で念願の『連獅子』を踊る、というものでした。天王寺屋はお歳を召していらっしゃったので、『連獅子』の毛振りなどは無理。鷹之資君を存分に目立つようにして、その間どうするかを考えるのが私の振付師としての役割でした」

あのとときの親獅子は、平櫛田中作ひんしりななかの六代目菊五郎の彫像（国立劇場ロビーにある）そのもののようないい形で、慈愛のこもった眼でじつと子獅子の毛振りを見つめ続けていた。

間狂言あひの「宗論」の僧には勘三郎と橋之助が出たが、これも勘三郎が長いこと「もし、お兄さんが結婚して、男の子が生まれて連獅子を踊るときになったら、僕、必ず宗論に出ますから」と言い続けた約束を果たしての出演だった。翌る月のコクーンコクーンの芝居（『桜姫』の現代版）のために髭をはやしたままの出演だったので、あのとときの舞台姿が今も眼に残っている。

「天王寺屋さんが亡くなったのは平成二十三年一月三日でしたが、その年の正月、新橋演舞場は『寿式三番雙』で天王寺屋が翁、鷹之資君が千歳せんざいをつとめることになっていました。十二月に猛稽古をしました、そのときは病院で父親を見舞っては稽古場に通う、という過密スケジュールで同情の余地は十分でしたけど、私はいつさい甘やかすことはしませんでした。結局それが彼のためですから」

このときの様子は、テレビ毎日放送の『情熱大陸』が勘十郎さんを取り上げたときに報



宗家藤間流 二世 藤間勘祖を偲ぶ会 平成8年8月23～25日 於国立大劇場

じられている。今回そのDVDを富十郎夫人の正恵さんからお借りして見たが、疲れ果てた十歳の鷹之資がそつとあくびを噛みしめる場面に胸が締めつけられた。

それにしても勘十郎さんの稽古の気迫はものすごい。張り扇で叩き台を激しく打ち叩いて、容赦なく叱声を投げかける。これがプロへの稽古というもののだろう。

「初日の舞台で、扇を開くのを忘れたでしょう。父親が危篤ということで気もそぞろなのはわかるけど、役者がいったん舞台に立てば言いわけはききません。でも間違えたことは本人が一番承知してますから、敢えて責めず慰めずで行きました。私が最も敬愛していた祖父（六世勘十郎）を失くしたのがちょうど鷹之資君の年頃で、遠い日の自分と重なりましたから事情はよくわかりましたけどね。番組の中でテレビ局の人が、初日の楽屋で優しい言葉をかけなかったんですね、って言いましたけど、はい、かけません、よかったですね、

という優しい言葉を信じなかったからこそ、今の自分がいるんで、と答えました」

しかし正恵さんによると、かつて子役たちから「お兄ちゃん先生」と慕われた若い宗家は、決して厳しいばかりではなく、稽古のあとで面白いビデオをそつと貸したりする優しい一面も持ち合わせている。

「お小さいころ、大河ドラマに出演するのがおいやだったそうなんですけど、大好きないたりや長介さんが一緒に出演するから、と言ったらすぐ承知なさったとか（笑）。鷹之資にもそのドリフターズのとこ、梅沢富美男さんの『勧進帳』とかのビデオを、お父さんには内緒だよ、って貸してくださったり。でも、主人も一緒になって喜んで観てましたけどね。

とにかく勘十郎先生は子供のころから大変な勉強家で、あらゆるお稽古ことや資料収集やらで息つく暇もないほどで、お母様の勘祖先生が見かねて、あなた、何か一つお捨てな

さい、とおっしゃったら、じゃあ学校の勉強を捨てます、って（笑）

勘十郎さんにこの話を伝える。

「はい、まったくその通りです。小学校からずっと青山（学院）でしたけど、高校から堀越（学園）に変わりました。三歳年長の海老蔵さんも、後輩に当る七之助君も、同じルートです」

勘十郎さんが尊敬してやまない祖父、六世勘十郎（二世勘祖）の舞台姿に接して私はつくづく素踊りの素晴らしさに魅了されたことがあった。勘十郎さんの生まれるずっと前のことで、歌舞伎座で開催された第一回『勘十郎の会』（昭和三十六年）のプログラムにあった、た円地文子（文子）の文章にも深く感じ入ったので、ここに引く。

「素踊の名手として、当代随一。振付師の踊は素で見せるのが本筋で、デッサンがかつきりしてゐるだけに、その上に衣裳をつけると

もたつく感じの多いことがある。反対に歌舞伎俳優の踊は素踊で見ると、間が空いて寒々する場合が多い。舞台上で衣裳をつけて踊ると、踊自身（踊り手）が未熟でも別の演技で補修してたっぷりとしたものにしてゐる。

勘十郎さんの素踊にはしかし普通素踊と云はれるものを遙かに越へた充実美と気品が溢れてゐる。（略）名人の芸といふものは由来、静謐で、同時に快楽を与へるものである。」

この会で六世勘十郎は團伊玖磨作曲、指導により『ふたり静』の静の霊を踊った。共演も総て素踊りで、里の女に六代目歌右衛門、社人（神宮）に二代目鴈治郎、里の娘に東蔵、梅玉・魁春も出演している。

のちに「六世宗家思ひ出の舞台」と題して、父の名舞台を三世勘祖が紹介している。それによると、能の『二人静』から想を得ているが歌詞はなく、「父が、始めはこんな感じ、ここはこのくらいの長さ、というように團先生に説明し、総て二人の感覚による曲作り」

だったそうだが、「普段踊り慣れない洋楽の演奏の中で」踊りの名手たちが「息の合った踊りを踊り、観客を魅了」した、とある。

勘十郎さんが言う。

「そのころ母は十代で、女学生ですね。フルオケで歌舞伎座で踊ったりした第一回勘十郎の会は、今やるとメディアに高く評価されるようなことをずつと前からやっていたわけですからね。祖父と私はわずか十年しか過せませんでしたが、祖父と一緒に遊びながら振付して創作した作品もあるんです。

平成二十四年の九月に祖父の二十三回忌追善の『藤間会』を開催しましたが、実は祖父の振付の代表作の一つである『雨乞其角』に勘三郎さんが御出演の予定だったんです。これの初演の折に祖父の相手役をつとめていらしたのが彼のお父様、十七代目の中村屋さんでしたので、そういう因縁もあって快く出演を承諾してくださっていたんですが、九月には病気で出演は不可能。その後、十二月五

日に、奇しくも祖父の命日と同じ日に亡くなってしまう。その年の三月に私が結婚致しまして、披露宴には元氣なお姿を見せてくださっていたのに、と本当にびっくりしたし、悲しかったです。

勘三郎さんはずつと以前、私が二十代のころ、三十になったら素踊りに徹したほうがいいと思うよ、と言ってくださってて、これなんかも祖父への深い尊敬の念から出た言葉だろうと受け留めているんです」

勘三郎は子供のころ毎日のように藤間宗家にお稽古に通い、壮年の六世勘十郎の薫陶を受けた。生前、勘三郎が『徹子の部屋』に出演した際、「あなた、子供のころ、芸能人は誰でも藤間御宗家にお稽古に通うもの、と思ってた、私に会って、御宗家には行ってきましたか？ もう僕は行ってきましたよ、って言ってたわね（笑）」と、からかわれていた。「中村屋とはいろんな仕事をしましたけど、楽しかったですね。ポイントを言えばバツと

宗家藤間流 金沢藤間会 特別公演〔舞踊百華〕で中村屋と舞台に立つ勘十郎さん（右）。
平成15年1月27日、石川県立音楽堂邦楽ホールにて。



やってくださるんですよ。振りが四十とすれば、踊って六十足して百にしてくれる。それでお客がワツと喜べば二百にもなるわけです。ずっと以前、NHKテレビに『大当り勘九郎劇場』という番組があつて、渡辺えりさんがバーのママさん役、そこに毎回中村屋がゲストを連れてくる。あるとき、即興で曲を作

って中村屋が踊る、という趣向があつて、そのときのゲスト津川雅彦さんがお題を出して、えりさんが作詞して、本條秀太郎さんが作曲、田中伝左衛門さんが作調（お嘶子）、私が振付したのを中村屋が憶えてすぐ踊る、ということをしたんです。

私が、こんな感じでどうでしょう、と言うと、わかった、って、頭の出だしだけ取って、あとは気分で好きに踊っちゃう、すごいなと思つて見ていると、おしまいのところは私が作つたようにちゃんと納めて終るんです。私が二十二、三のころでしたね」

ここでまた勘十郎さんは、中村屋と自身の祖父、六代目菊五郎と六世勘十郎に思いが至る。

「六代目が得意とした『羽根の禿』^{はねのハゲ}というのがありますでしょ。あの中で禿が『宵は待ち』を踊るんですが、あれは全部六代目が好きなようにパーッと踊つて、おい、俺、今どうやった？　って祖父に訊くんですって。それを

うまいこと綴り合わせて作つたのが、昔のその当時の現状だったみたいですね。やつぱり六代目は大天才だったんですね。

祖父に言わせると、六代目菊五郎は決して踊りはうまくなかった、もつとうまい役者はほかにもいたけど、時折放つすごい舞台はそれはそれは神がかつていて、月のうち三日か四日の、それを観たいがゆえに毎日通つてもいい、というくらいの方だったそうです。

『禿』に限らず、六代目さんは衣裳も気分を変えたりして毎日好きなように踊る。それがまた素晴しくて、祖父はそれをきちんと憶えとく。そういう踊りだった、ということですよ。伝統芸能の世界は滅多に余人の立ち入る隙を与えない。襟を正す思いで聞いた。

（この項つづく）

開眼かいげんと申すは、本体は仏師がまなこをいれひらきまいらせ申し候なり。これをば事の開眼と申し候なり。つぎに僧の仏眼しんごんの真言をもつて、まなこをひらき、大日の真言をもつて、ほとけの一切の功德くどくを成就し候をば、理の開眼と申し候なり。

（法然上人『百四十五箇条問答』）

開眼とはもともととは、仏師が仏像の目に筆を入れ眼の開いたお姿にすることで、これを「事の開眼」といい、そのあとで僧侶が、「仏眼呪」という真言を呪して仏像の御眼を開き、大日如来の徳をあらわす真言を唱え、仏さまのあらゆる功德がその仏像に具わるように勤めることを「理の開眼」といつております。

拝む対象

過日、仏教系宗教各宗派の話題を伝える新聞、いわば“業界紙”一面に、こんな記事を見つけた。

「3Dプリンターで仏像複製する寺院増」

ふつう、プリンターといえば「紙に印刷」する“あれ”を思い出させる。ほんの十年ほど前までは、かなり大きくゴツいものが多かったが、最近はコンパクトになり、しかも印刷のクオリティが格段にアップした。

この「紙に印刷する」という概念をまったく打ち破ってしまったのが3Dプリンターだ。前者はいわば二次元⇨平面印刷機であるのに対し、後者は立体の「物」を「作る機械」ということになる。「プリント⇨紙」との観念が根付いている私などには、「プリンターが物体を作る」ということに違和感を覚える。辞書を開いても「print」「printer」に「立体」や「造形」をおおす意味など——あった！最後のほうに「母型、鋳型、押して造ったもの」とある。これは驚きだった。無知だった。

話がプリンターに傾きすぎた。先述の記事によれば、盗難に備えるため、あるいは普段は非公開の仏像（秘仏）の精巧な複製をこの3Dプリンターで作り、通常はこれを拝んでいただこう、ということらしい。なるほど、そういう事情、

利用法なのかと、一瞬合点がいったような感じはしたが、しかし、仏像といえば仏師が工房で木屑にまみれながら寡黙にコツコツと彫り上げるイメージが離れず、その合点には「(?)」が付いている。仕事で何度か仏師を取材したことがあるが、一心に鑿^のを振るう姿が目には焼きついていて、その眼差し、体全体が発するオーラは圧倒的な気迫となってこちらに押し寄せてくる。それが現代や、機械でガチャガチャッ、と。やはり違和感は拭えない。

が、これは偏見かもしれない、ともすぐに考えた。これまで数えきれない回数、シャッターを切って仏像や仏画の写真を撮影してきたが、これは二次元コピーを製造していることにほかならない。本や新聞を開けば、そうした写真はいくらかでも載っている。最近は小さな可愛らしい仏像のマスコットやストラップ人形をぶら下げている人もよく見かける。

以前、法然上人御影(像)の写真をあしらった出版物を刊行後、しばらくして、「法然さまのお顔が気になって処分できない……」との声が編集部に寄せられたことを思い出した。作り手とすれば、上人のお顔を知ってもらいたい、上人に親しみを感じてもらいたい、ただそれだけなのだが、読者がそういう感じ方をしていたとは思ってもよらなかった。「仏さま、お祖師さま」のお姿の「取

り扱い方”を考えさせられた。

かといって仏像や祖師の写真を掲載しないわけにも、マスコットの使用を禁ずるわけにもいかない。ふと、仏師取材時にいただいたコメントの一つを思い出した。

「製作中は両足で押さえ付けたりして彫りますが、完成して開眼式がすんだら絶対に安易には手を触れません。いったん僧侶に撥遣式（お魂抜きはっけんの儀式）をしていただいてから修正や修理の手を入れます」

ここだ。「拝む対象として」作られたものか、「拝む対象として」そこにあるものかどうか、という点だ。仏像や仏画の普及や認知のために、あるいは文化財保護の観点から、物体であれ紙媒体であれ「コピー」されたものには一般には開眼式は勤めない。開眼式という儀式作法——厳肅かつ聖なる——の介在の有無が決定的なのだ。言い逃れと責められるかもしれないが……これで明日から安心してシャッターが切れる。もちろん、「拝む対象としての『本物』」は論を俟たず、「コピー」といっても粗末に扱わないのが理想ではあるが。

件の3Dプリンター製の仏像にそのご寺院が開眼式を勤められたかどうか、そこまでは存じ上げていない。

（小村 正孝）

東日本

大震災の被災地を訪れて

⑦

特別編「関東・東北豪雨ルポ」

東京世田谷感心寺住職
関東ブロック浄土宗青年会理事長

成田淳教



避難所となった大楽寺。左手前は直後に届けた自転車。

この連載は「東日本大震災の被災地を訪れて」をテーマにしていますが、今月は予定を変更し、平成二十七年九月関東・東北豪雨で被災した茨城県常総市に行ってきましたのでその時のことを書かせていただきます。

九月九日にいつもの福島県いわきの浜〇（はままる）カフェの手伝いをし、その晩車で東京に戻りましたが、件の豪雨に遭い湾岸線は前が見えない程の雨でした。翌日、関東ブロック浄土宗青年会の会議の為に大本山増上寺に上がる途中で鬼怒川堤防決壊のニュースを聞き、さっそく会議後から情報収集に努めました。

関係諸団体と連絡を取りつつ、今後の対応を検討し始めました。翌十日の情報では、常総市の浄土宗寺院は、四ヶ寺が床下、床上の浸水被害を受け、二ヶ寺が避難所に指定されているとのことでした。そこで被災教区やその他の関東ブロック内の教区青年会と連絡をとり、まずは被災した寺院の状況を把握し、

各寺院から依頼があれば、片付けや清掃などの活動することとして、お彼岸前の平日で予定を空けておくこととしました。

翌日には、以前に青年会で一緒にいた茨城教区浄土宗青年会元会長、長谷川上人の大楽寺が避難所になっていて、その状況についての情報が入りましたので、直接電話し必要なものを伺ったところ、「物資は十分に届いている。避難されている方々が自宅の片付けに行き来するのに歩いて往復しており、自転車があれば助かります」とのことでした。そこで、至急近所の自転車店で手配し、十四日に東京の青年会の災害対策委員会の後輩と共に合計一〇台の自転車を貨物タイプのハイエースに乗せ、届けました。

大楽寺の避難所としての状況は、ライフラインは無く、発電機で携帯電話の充電と井戸のポンプを動かしている状況でした。

そこで、そのポンプからホースをつないで本堂裏からトイレに引き込む手伝いをしまし

た。被災時にはトイレの確保が急務となりました。翌日は、大楽寺に避難されている方の中で、ご自宅が残っているお宅を伺い、水に浸かってしまったものの廃棄を手伝いました。

大楽寺での支援を終え、もうひとつの避難所、報國寺へ向かい住職から話を伺いました。

報國寺に避難された方々は既にご自宅に戻ることができたとのことでした。また、避難所の運営に関しては、市の職員は避難されている方に仕事を頼むことはできない様子とのことでしたが、むしろ避難されている方々に避難所の色々な仕事を割り振ると、かえって活き活きと動いていただき、かつ連帯感が芽生えるのか、共同生活が上手くいくようだったとのことでした。

浸水した家屋や町並みは、海水か河川の水かの違いはありますが、東日本大震災と見たところは同様の状態でした。ただ、東日本大震災との大きな違いは、局所的災害であったことです。

東日本大震災で全国的にボランティアの意識や災害支援の意識が高まっていたことと、被害が局所的であったことから、すぐに多量の物資が集まり、多くのボランティアが入りました。市内の高校等も休校となり、高校生も自宅の片付けやボランティアに入っているとのことで、作業が始まっている場所では、各家屋に三〜五人くらいの方が入り片付けをしていました。

問題は、細かい砂埃が常に舞っていて健康被害が出る点でした。また多数のボランティアの方々が入ることにより、常総市に入る道が交通渋滞し、廃棄する物を集積する場所へ車で運ぶのに数時間も掛かることです。我々も一度渋滞に並びましたが、片道二時間もかかり、一日二往復が限界かと思われました。浸水したエリア外では、コンビニエンスストア等の商店が通常営業していましたが、ボランティアなど急に多くの方が利用しますから被災直後は品薄状態にならざるを得ないと

いう問題もあったようです。

東日本大震災でも問題になりましたが、ボランティアをする側としては現地のニーズをよくよく把握し、新たな問題を引き起こさないように注意する必要性を感じました。

最後になりますが、東日本大震災の被災地同様、豪雨災害の被災地の今後の復興にも、継続的な募金などの支援と、ご縁を大切にしたい、できることをし続けることが大切なのではないでしょうか。

なりた じゅんきょう 東京教区玉川組 感応寺住職

昭和50年1月、世田谷大吉祥寺に生れる。平成13年より感応寺住職

平成22年浄土宗東京教区青年会会長。平成24年東京浄土災害対策委員長

平成26年関東ブロック浄土宗青年会理事長（現職）

ゴミの集積所へは大渋滞。



町中のようす。



町中の川は流出物だらけ。



水に浸ったピアノ。

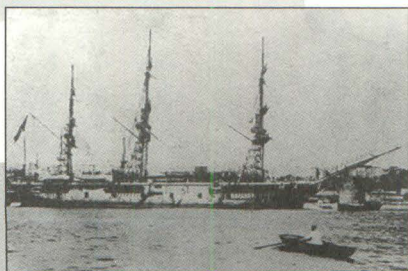


トルコと日本

森清鑑

第四回

友好の絆2



遭難事件から始まった、
信頼、互恵、友好へ

生存者を送り届けた軍艦比叡、金剛がトルコを去る際、国王アブデュルハミト二世は、田中艦長に日本語教師を一人残してくれないかと依頼する。トルコの士官に日本語を学ばせたいというのである。

艦長はこれに応えて野田正太郎を推薦する。彼は福沢諭吉が創設した時事新報の記者で、同社が集めた義捐金を持参し、軍艦に同乗してきた者。喜んだ皇帝は、彼をトルコ陸軍大学校に招致。そこで野田は選抜士官数名に日本語を教えることになる。イスラム圏初の駐在特派員の誕生である。

山田寅次郎の登場

山田寅次郎。後の山田宗有。茶道宗流の八世家元。若くして実家の中村家（沼田藩家老職の家柄）から茶道家元、山田家に養子入り。

しかし、行動力溢れる彼は、茶道を高弟に任せ、もっぱら外国語の習得、出版事業に精を出す。海外との事業を興したい。そんな時、トルコ軍艦エルトゥルルー号の串本大島での遭難を新聞で知り、衝撃を受ける。何か支援することはできないか。トルコ遭難者支援の義捐金募集を決断する。精力的に飛び回り、講演し、その結果、驚くほどの義捐金集めに成功する。そして、その義捐金をいかなる手段でトルコに送るか思案。その結果、広い人脈を活用し、時の外務大臣青木周蔵との直接面談に成功する。

寅次郎の行動力には恐れ入る。青木は熟慮の上、貴殿が直接トルコに届けたらどうかと進言。そして海軍がフランスで竣工の新鋭艦松島を引き取りに行くのでその船に同乗したら良いと助言する。さらに青木は、遭難者をトルコに送り届けた軍艦比叡の田中艦長を紹介。田中は寅次郎の乗り組みを快く引き受ける。この時、田中はトルコ皇帝が日本との初

の通商取引を希望しているとさりげなく寅次郎に伝えている。寅次郎は、日本文化を知ってもらおうと、日本の美術品を調達。その中に、実家、中村家伝来の、鎧と兜それに豊臣秀頼所蔵の陣太刀があった。これは今に至るもトルコの宝殿、トプカピ宮殿に展示されている。

ともあれ、今回の主目的は、義捐金を届けることにある。こうして田中の計らいで、船に乗ることができ、フランスで下船すると単独で、トルコのイスタンブールに到着する。

この時、寅次郎若干二十六歳。着くと寅次郎は、田中艦長の紹介状を持って、早速、野田を訪問。野田はこの若者をいたく気に入り、面倒を見る。そして集めた多額の義捐金をトルコ外務省に届ける。寅次郎の到来は、日本の民間人が義捐金を提供するためにわざわざトルコに来たとトルコ中の評判になる。皇帝は感激して、寅次郎と接見。宮廷の馬車が迎えに来て、宮殿へと接待される。アブデュル

ハミト二世に拝謁。皇帝は義捐金に対して感謝の意を述べ、寅次郎を大歓迎。応えて、寅次郎は、中村家伝来の鎧と兜、秀頼の陣太刀を贈呈。皇帝は、エルトゥルルー号遭難事件の日本人の扱いに改めて感謝し、日本人を尊敬していると述べ、日本と国交を結びたいと熱く語り、寅次郎にイスタンブールにとどまると欲しいと語る。それには、お互いの言葉を理解する必要があるので、野田さんともども、陸海軍士官に日本語を教えてくれまいかと要請する。

寅次郎にとっては、集めた義捐金を直接渡すこと。これがトルコに来た目的だが、トルコ側のかような歓待を受け、しかも漠然たるものであったが、嘗て海外との通商の道に従事したいとの願望が芽生え、皇帝の意の通り、トルコに逗留することを決める。そして以後二十年に亘り、トルコに居住することになる。まずは、皇帝の指示通り、士官学校で野田と共に日本語を教え、またトルコ語を教わる

日々が始まる。まもなく、野田は帰国し、一人、寅次郎が日本とトルコをつなぐ役目を果たす。

寅次郎は、皇帝からトルコ商工務省直轄の商品陳列館（海外物産の取引所）の日本代理人を委託され、日本製品の普及に尽力する。さらに寅次郎が懇意にしている、大阪の中村商店（繊維会社）がトルコとの初の交易を望み、イスタンブールに支店を設けることになる。寅次郎は、その支配人として活躍。日本画好みの皇帝に比べ、各種の日本の美術品を納める。加えて、皇帝及び側近に茶の湯を披露。日本文化の伝播に尽力する。

この間、日本からやってきた著名人の接待も買って出る。徳富蘇峰、後の総理大臣寺内正毅、建築家伊東忠太、紀州徳川家十五代徳川頼偏など錚々たる人物が皆、寅次郎の世話になったのである。なにしろトルコには彼しかないのだから。皇帝はますます日本を尊敬するようになる。民間の代理大使としての

寅次郎の活躍は、めざましいものがあつた。

こうして第一次世界大戦勃発で帰国のやむなきに至るまで、寅次郎は日本とトルコの正式な外交関係樹立に向けて奔走。トルコで最も有名な日本人となった。なにしろイスタンブールには「山田寅次郎広場」があるほどである。

帰国後の寅次郎

帰国後は大阪で製紙会社（三島製紙所）を立ち上げ、事業展開。日本とトルコの交流に尽力し続ける。一九二五年、大阪商工会議所が中心となって日土（トルコ）貿易協会が設立され、初代理事長に就任。翌年、高松宮殿下を総裁に招き、日土協会を創設。一九二八年には、日土貿易協会主催でエルトゥルル号犠牲者の大々的な追悼祭を大島の檜野崎で開催している。

そして寅次郎は本業に戻る。茶道宗流の第八世家元として、ばらばらになっていた、組

織をまとめ上げ、以後宗流の発展に尽力を尽くす。宗流は、忠臣蔵に関わりのある、吉良義央、大高源吾などを指導した山田宗（千宗旦の弟子）が創始した茶道流派である。本所に居を構え、江戸華やかなりし頃、非常に隆盛した流派であった。

トルコ共和国

時代は変わり、トルコ共和国が誕生。初代大統領ケマル・パシヤ（アタチュルクⅡ父なるトルコ人の意）から共和国記念祭の招待状が寅次郎のもとに送られてくる。彼は新首都アンカラに向く。大宴会が開かれる。と、大統領はつかつかと彼の前にやってくる。そして、なんとこういふのである。「私はあなたと面識があります。昔、イスタンブールの

士官学校で日本語を習っていた生徒の一人なのです」。ケマル・パシヤは新たな国造りの規範を日本に求めた。彼は執務室に明治天皇の遺影を飾り、尊敬の念を表していたのである。

【参考文献】

「明治の快男児トルコへ跳ぶ」山田邦紀・坂本俊夫著 現代書館

「エルトゥルルー号の遭難」泉美千子著 小学館

「トルコ世界一の親和国」森永壽著 明成社

その他、ウィキペディアなど

十夜法要——詠み人・蓮門小子

千年の善行よりも尊かり十日十夜の不断念仏

阿弥陀経講義のために光明寺九世京へ上りゆくなり

進講を受けて雀躍奉る明応四年土御門帝

眞如堂引声念仏修せるのち勅許を得たり十夜法要

積善の十夜会の寺灯されて浄土遠からざるところなり

小説 快僧渡辺海旭

壺中に月を求めて

前田和男

第六十三回

第二部

ライン
来江の古城遥かなり

いざ、博士号取得へ?



導師・端山海定、遷化する

渡辺海旭はマックス・ヴァレサーの頼みで『中論』の独語訳を手伝ったことで、原典突合という根気のいる作業が苦でなくなり、博士論文を提出日の半月以上も前に一気に仕上げる事ができた。事前にロイマン教授に見せると、教授は当座の研究を脇においてその日のうちに徹夜で読破、太鼓判を押してくれた。そして、結果はそれとおりになった。

海旭は、最終の面接試験について、かつて雲来から「体験談」を聞かされていたので、不安も戸惑いもなかった。ドイツ人の受験生たちは一様にシルクハットに燕尾服という威儀を正した出立ちで、見るからに緊張に凝り固まっていたが、海旭一人は、気楽な茶会によばれた客といった風情で、着慣れたフロックコートで臨んだ。選考委員のほうも、ながら茶会の主人として海旭に接してくれた。インド学の専攻の某老教授などは、論文の中

身には一言もふれずに、「ところでワタナベ君、誰にこの博士論文を捧げるつもりかね」と訊いてきた。これで通ったことを確信した海旭はこう返した。

「もちろん、留学してこの方ご指導をいただいているロイマン先生であります」そこで一拍おいてから続けた。「あと二人おります。一人は母親でしたが、残念ながら一年前になくなりました。それで一時、論文に手がつかなくなったのですが、その母が、私を仏門へと導いてくださった端山海定師のために何が何でも博士号をとるようにと遺言を残しました。それで気持ちを取り直して、今日この日を迎えることができました。したがって、その端山海定師に博士論文を捧げとうございます」ロイマンに結果を報告すると大いに喜び、雲来の時と同じく一月ほど後に祝宴を張ってくれることになった。場所は同じく大学前の馴染みのレストラン「ゲルマニア」で、これまた同じく海旭の故国帰国のための歓送会を

も兼ねるはずであつた。ところが不測の報らせで、それは頓挫を余儀なくされた。

はるばる横浜を發つた船に揺られて送られてくる妹からの「定期便」の中には、いつものように『浄土教報』が同梱されていたが、そこには端山海定師の遷化^{せんげ}を悼む次の記事が掲載されていたのである。

「深川区安宅西光寺前住職端山海定師は予て所勞ありしが、去二十九日遂に遷化せられたり、同師は曾て記者等が本校在学中屢々手帳類を頒たれたるが、是は皆法施物の包紙を引延し、自ら罫紙に刷られたるなど、自ら奉ずること薄くして学生等を優遇せられたる奇特の人なりしに今や易簣^{えきさい}せらる惜むべきなり、特に思ひ遣らるゝは在独渡辺海旭氏の心事なり、氏は晨に其慈母を喪ひて其涙未だ乾かざるに、此嚴師の計に接す、氏の心情を想察するだに腸九回するものあるなり、幸に健在帰朝の一日も早からむことを祈る、因に端山師の葬儀は去一日午后一時より西光寺に於て

最と丁重に執行、参列の道俗約五百名に及べるが、况下は生前の功勞を追賞し玉ひて權僧正を贈られたり」(明治四十年十月七日付、七百六十八号)

俗塵の世界から聖なる僧の世界へ

海旭はわが目を疑つて、ふた月も船にゆられて届けられた宗門の機関紙へ再び目をやった。しかし幾度読んでも計報が変わるはずもない。はらはらと涙がこぼれ落ちて紙面に滲みをつくり文字をぼやけさせた。記事の前段のエピソードに、「そうそう、そういう方だった」と大きくうなずきながら独りごちた。記事にある「本校」とはかつて海旭が海定の援助をうけて正科・高等専門科あわせて六年間通つた宗門の最高学府だった(現・大正大学・同大学院)。海定の「足長おじさんぶり」は学生たちの間では有名で、なかでも語り草は手帳だった。それは記事にもあるように、檀家からのお布施の包み紙などをほぐして自ら

罫線を引き手帳に仕立てた「手づくり品」で、市販のものと違って不揃いでお世辞にも使い勝手はよくなかったが、それがかえって学生たちの向学心を督励する効果を生み、海旭もゆかりの一人として誇らしく思ったものだった。

海旭の心をさらに揺り動かししたのは、手帳のエピソードの後の海旭への言及だった。たしかに母親の死から一年も経ずして人生の師を喪ったことは、「腸を九回も断たれるほど」の痛恨事ではあった。しかし、師への惜別の悲しみはつのつたものの、おそらく記者が期待をよせたのとは逆で、海旭から帰国の念はかえって失せた。せっかく博士論文を仕上げ、博士号を取得できたのに、いったい誰にそれを報告すればいいのか。いまさら国に帰ってなんになるとむしろ虚脱感にとらわれたのだった。

海旭は故国のある東の方へ向き直って合掌すると、端山海定師との出会いがまざまざと

思い出され、しばし深い回想に引き込まれた。端山海定と初めて出会ったのは明治十八年（一八八五）、いまだ俗塵の世界にあつてその名も渡辺芳蔵という十三歳の少年であった。家業が傾いたため、家計の救いになればと当時最先端の新事業であった出版社・博文館の小僧になったものの、どうしても虚飾の世界になじめず、伝手をたよって門を叩いた先が小石川初音町の源覚寺の住職・端山海定だった。

源覚寺は、寛永元年（一六二四）、後に増上寺の第十八世貫主となる定誉上人が創建、徳川秀忠、徳川家光も詣でた古刹であった。境内には鎌倉時代の仏師、運慶の弟子の作ともいわれる右目が黄色く濁った閻魔像がある。宝暦年間（一七五一〜六四）、眼病に悩む老婆がこの閻魔像に快癒を祈って日参したところ、夢枕に閻魔大王が現われ、「満願成就の暁にはわが隻眼を進ぜよう」とのお告げがあり、老婆の眼は治ったかわりに閻魔の目が濁ったという。以来、老婆は閻魔の好物とされ

る「こんにやく」を断って、閻魔大王に供え続けたことから、閻魔像は「こんにやく閻魔」と呼ばれるようになり、人々から信仰を集めて、毎月十六日には縁日が立ち、海旭が寺に入った当時も参詣客でにぎわっていた。

住職の海定は海旭を一目見るなりその才覚を直感したらしく、「わしの一字をとって海旭とする。この寺でじつくりと修行にはげむがよい」といって手ずから剃刀で海旭の頭を剃り、得度の儀式を施してくれた。そのとき海定から言われた言葉が思い出された。

「当寺は目の病に効験があることで知られておるが、大事なものは心の眼だ。娑婆には眼があっても何も見えぬ人が多くおる。いいか、海旭、心の眼、これを澄ますことだ、それが僧侶としての修行の要諦だ」

深く理解できたわけではなかったが、なんとなく意味を呑み込んで、海旭は剃りあがったばかりの頭の鉢を手で撫でながら神妙にうなずいたものだった。そのときのことを思い

出して同じ仕種をしている自分に気づいて海旭は苦笑いをもらした。俗塵の世界から聖なる僧の世界へ——思えばそれが海旭の転機であり原点であった。

海旭の初論文、老婆のための

「地藏和讃注解」

しかし得道は転機ではあったが、その後になされたある出会いがなければ、一転機にはなっても人生最大の転機にはならなかったろう。そんな思いが去来して、海旭は「あの時の刀自はどうされているだろうか」とつぶやいていた。

あれは仏門に入ってから二か月か三か月目の「こんにやく閻魔」の縁日の日だった。混雑をきわめる境内に、しばしば参詣に訪れる老婆を認めたので、足のわるい老婆を介助してこんにやく閻魔へと連れ添った。老婆は閻魔の濁った片目を手でふれ合掌してから、つきは塩地藏へ詣でた。これにも海旭は同道した。

この地藏尊は治したいところへ塩をつけると
ご利益があるという源覚寺のもうひとつの人
気参詣どころだが、老婆は手にした地藏和讃
を広げると、声をくぐもらせながら、たどた
どしく誦じ始めた。

「…これはこの世のことならず。死出の山路
の裾野なる。さいの河原の物語。聞くにつけ
ても哀れなり。この世に生まれし甲斐もなく。
親に先立つありさまは、諸事の哀れをとどめ
たり…」

老婆は漢字が判読できないらしく途中でつ
かえると、海旭は手元を覗きこみ老婆を導い
て最後まで唱和しおえた。

「…大慈大悲の深きとて、地藏菩薩にしくは
なく、これを思えば皆人よ、子を先立てし
人々は、悲しく思えば西へ行き、残る我が身
も今しばし、命の終るその時は、同じ蓮の台
にて、導き給え地藏尊。両手を合して願うなり。
南無大悲の地藏尊。南無阿弥陀仏阿弥陀仏」

さながら眼が見えぬ老母の手を引く孝行息

子のようなだった。地べたに頭がつくほどに曲
がった腰をさらに曲げて礼を言う老婆に、海
旭は言った。「と、刀自は、お子さんを、小
さい頃に亡くされたのですね」

老婆はうなずくとひとりごとのように言っ
た。「この和讃を唱えると、あの子がまぶた
に浮んできて…元気で楽しそうにしている頃
のあの子が…」と声をとぎらせると続けた。
「小僧さん、なんでだろうかね。地藏和讃に
はなんでそんな有難いご利益があるのだろう
かね…実はろくに字も読めんで意味もようわ
からんのだが…意味がわかればもつとありが
たさもますかも知れんのう…」

老婆が手にしていた和讃をよくよく見ると、
女文字ともいわれる変体がなで、読み仮名と
覚書が記してあった。

海旭は神妙な顔つきで、「わ、和讃の意味
については、次回の縁日のときに詳しくお話
しましょう」と返すと寺の雑務に戻った。

それから数日後、海旭は檀家への届け物を

言いつかって外出、自分の部屋に戻ったところ、住職の海定が文机を前に妙な顔つきで居住まいを正して待ち受けていた。文机には書きかけの原稿を残したままだった。住職の真似をして棄てられる運命にあるお布施熨袋を開いて裏の白地を原稿用紙代わりにしたもので、四、五十枚はあっただろうか。「地蔵和讃注解」と冒頭に大書してあり、こんな書き出しだった。

「そもそも和讃とは、仏や經典に対して、和語をもってほめたたえる歌であります。おおむね七五調で、もっとも一般に知られているのが地蔵和讃であり、六道で苦しむ衆生を教化・救済する仏の化身たる地蔵をたたえるものです。地蔵は、子育て、火防け、盗難除け、病氣除けなど庶民のあらゆる願いをかなえてくれる仏として各地につくられ：」

その後には、漢字が読めない老婆でもわかるように、地蔵和讃の一字一句をていねいに読み下し、注釈がほどこしてあった。

注釈原稿のかたわらには地蔵和讃関連の本が数冊あった。得度の後、住職に寺の中を案内されたおり、海旭が書庫の蔵書に興味を示すと、いつでも自由に閲覧して構わないと言われたのをさっそく実行したのだった。海旭はてっきり住職に断わりも入れずに本を持ち出したことを咎められるのだと思い、海定の前へ膝を折って直ると、「ご、ご住職、申し訳ありません」と低頭し、事情を説明した。

それを聞き終えた海定は身を乗り出すと言った。

「どうやら、わしはお前の才覚を低く見ていたようだ。これを見て驚かされた」海定は机上の原稿を取り上げると言葉を継いだ。「得度したばかりの小坊主が地蔵和讃にこれほどの講釈と注解をつけられるとは恐れ入った」住職は一息入れると海旭を見つめた。「もう一つ、蒙昧なる老婆をやさしく受け入れて導く作法にも恐れ入った。優れた僧に二種ある。一つは仏の教えを追究する学僧、もう一つは

仏の教えを人に施す徳僧だ。ひよっとするとお前は二つを備えておるかもしれぬ。このままお前をわしのもとにおいて修行させるのはいかにも惜しい」海定は天井を見上げてしばし瞑目してからおもむろに口を開いた。何かが閃いたようだった「そうだ。今年、宗門の選良たる僧侶を養成する新しい制度がつくれる。そこへ行け。わしが後見人になる、学費も出す」

かつて増上寺には、宗門の東日本の総本山として浄土宗の僧侶を養成する「檀林」という学寮制度があり、海定もそこに学んだ一人だった。それが明治維新に伴う廃仏毀釈で崩壊されたのを立て直すのだという。

海旭に否やのあらうはずはなかった。こうして海旭は浄土宗学東京支校へ入学、その後本校へ進み、さらに宗門の興望を担ってドイツに留学、ついに博士号まで得た。

海旭は長い回想から覚めると、天を仰いでふうっと長嘆息した。今の自分があるのは、

老婆と海定住職の導きによるものだ。博士論文を書き上げられたのも、あの地藏和讃への註解を海定師が評価してくれたからだ。考えてみれば、あれが学僧としての原点であった。今一度、亡き端山海定師の言葉が海旭の脳裏によみがえった。

「優れた僧に二種ある。一つは仏の教えを追究する学僧、もう一つは仏の教えを人に施す徳僧だ。ひよっとするとお前は二つを備えておるかもしれぬ」

博士論文を完成させ学僧として一区切りをつけることはできた。しかし徳僧への道はどうだろう。学僧としての薰陶をロイマン教授から受ける傍ら、当地のキリスト者や社会主義者らと交わって福祉事業の知見を深めてきたが、徳僧としては未だだ：

いまや海旭の胸中には故国への帰心は消えていた。
(この項つづく)

浄土誌上句会

●銀

〈特選〉
銀輪の一団過ぎし志摩の秋

石原 新

伊勢志摩国立公園を自転車で一巡りという
のは、一日のコースとして最適だろう。よく
晴れた秋空の下、何台もが連なっていく。前
半に「ギンリン・ダン」と撥音「ン」を連ら
ねたのが、はずむ気分を出している。

〈佳作〉 驟雨きて街いっせいに銀色に

因幡亜希子

夫と歩く銀座なつかし秋の風

吉崎美和子

湾跨ぐ銀河の帯の光りかな

浜口佳春

●座

〈特選〉
空白となりし父の座虫しぐれ

池田 伊吹

「空白」というのは亡くなられたというこ
とだ。家ではいつも座るところが決まってい
た。食事の時も当然その座は決まっていたの

が、今はもう空白になったままである。空白の座が時々父を思い出させる。

〈佳作〉

夏深くなる歌舞伎座の立見席

斉田 仁

正座して夏座布団のごわごわす

入谷隆平

新涼や座禅の首が少し揺れ

今田波瑠子

●自由題

〈特選〉

夏痩せと言つては少し嬉しそう

西上 章造

やや小太りの人のことだろうか。夏痩せしたのだろう。体には気をつけなければいけないのだが、痩せてちょうどよい体形になったのだ。これなら夏痩せのままでいてほしい、などと思っているのだろう。

〈佳作〉

我先にどつと出てゆく送り盆

小宮山琴江

今日一日良きこと多いわし雲

東 保

ふと目覚め布団ひき寄す旅の宿

増田信子



誌上句会〈編集部選〉

■銀

銀漢や北の大地に牛舎建つ
 亀の鳴くたび銀行の名が変る
 夏惜しむ金糸銀糸の帯を締め
 夏空が好き銀塩のカメラ好き
 銀色の高速道路大西日
 夕焼が消えて銀座に古い師
 きらきらの銀座八丁敗戦日
 銀山のむかしへ消えて夏帽子
 放蕩の身はあの銀河この銀河

■座

冬ざるる磯に横たう座礁船

石原 新
 斉田 仁
 佃 篠江
 秋山 壮一
 遠井 三策
 町田 幸麿
 井口 栞
 蓬萊 幸久
 加納 陽三
 浜口 佳春

包帯の犬寝ておりぬ夏座敷
 夏帽のひとの体育座りかな
 裾割って座る楽屋の白浴衣
 一僧の座高は高し夏座敷
 この中に座敷わらしのいて涼し
 全員が座頭市役夏芝居
 座敷わらしがちょこんと座る夏の間
 打水の路地は歌舞伎座へと続く

■自由題

八月一日和光の時計正午なり
 品書きを横目で眺め秋の膳
 格差なき平和を願う終戦日
 幼な猫命終えたる子規忌かな
 名月や法体老いし芒見る
 倍音の揺らぎて耳の万灯会
 振り向けばわが全開の薄原
 下校時のユーモレスクや一位の実
 川霧の途切れに錆びて照準儀
 またひとつ野菊の暗示古寺の谷
 天高く紙幣に小皺ありにけり

服部詩郎
 月島恭子
 菊田 哲
 森田雄三
 小林苑を
 内藤隼人
 宮前美由子
 笠井亜子

小林苑を
 佐藤雅子
 佐藤雅子
 飯島英徳
 飯島英徳
 島地陽子
 三島敦子
 芝崎恵子
 伊藤 雄
 清水 透
 水野里久

浄土誌上句会の
お知らせ

兼題

自由題
 馬場
 自由題

締切・二〇一五年十二月五日
 発表・『浄土』二〇一六年一月号
 選者・増田河郎子（『南風』主宰）
 応募方法

●いずれの題とも数の制限はありません。

●特選各一名・佳作各三名

葉書に俳句(何句でも可)と、住所・氏名を必ずお書き下さい。

宛先

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館内
 月刊『浄土』誌上句会係

さっちゃんねネッ

かまち♡ふろう



編集後記

気がつけば一枚となったカレンダー 岱潤

先日全日本葬祭業協同組合の六十周年の大会に招かれ出席した。記念のシンポジウムが開かれ、そのテーマが「お葬式の必要性を考える」であった。

パネリストの一人日本消費者協会の方はそのテーマにかみつき、「葬祭業の方がお葬式の必要性を考えると、どういうことでしょうか」と仰っていたが、現実がそこまでの危機感を感じ取っているという事でしょう。パネリストの一人世界葬儀連盟会長の方は、この傾向は日本だけではなく、二十年も前からカナダでも「直葬」の流行に頭を悩ましているとい

う話をされていた。宗教離れはどうも世界的現象のようだ。

しかしカナダでは、最近葬儀を行う数が増えてきた傾向があり、質素でしっかりとした儀式と、盛大な別れる会の二度葬儀を行うことが流行しているという話をしてくれた。また日本でも消費者協会の方のアンケートで、葬儀を行った方は、してよかったという方の割合が多く、直葬で済ませた方は、行えばよかったという方の割合が多いことも紹介してくれた。我々にとって一番大事なことは、愛する人を失った直後の遺族の話を、聴いてあげる信頼できる人の存在になりうるかということではないだろうか。僧侶にし

っかりした儀式と同時に、法話を求めている人々も割合が多かった。(長)

編集チーフ
編集スタッフ

長谷川岱潤
斎藤晃道
佐山哲郎
青木照憲
村田洋一

浄土

八十一巻十一月号 頒価六百円
年会費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可
印刷 平成二十七年十月二十日
発行 平成二十七年十一月一日

発行人 佐藤良純

編集人 大室了皓

印刷所 株式会社 シーティーイー

〒一〇五〇〇〇一

東京都港区芝公園四七四明照会館四階

発行所 法然上人鑽仰会

電話 〇三三三七八六九四七
FAX 〇三三三七八七〇二六
振替 〇〇一八〇・八・八二八七

雑誌『浄土』
特別・維持・賛助会員の方々

飯田実雄(駒ヶ根・安楽寺)
蔵谷勝正(目黒・祐天寺)
魚尾孝久(三島・願成寺)
大江田博導(仙台・西方寺)
加藤昌康(下北沢・森厳寺)
熊谷靖彦(佐賀・本應寺)
桑原恒久(川越・蓮馨寺)
桑原勇慈(甲府・瑞泉寺)
佐藤孝雄(鎌倉・高德院)
佐藤成順(品川・願行寺)
佐藤良純(小石川・光圓寺)
東海林良雲(塩釜・雲上寺)
須藤隆仙(函館・称名寺)
高口恭行(大阪・一心寺)
中島真成(青山・梅窓院)
中村康雅(清水・実相寺)
中村瑞貴(仙台・愚鈍院)
野上智徳(静岡・宝台院)
藤田得三(鴻巣・勝願寺)
堀田卓文(静岡・華陽院)
本多義敬(両国・回向院)
松濤泰彦(芝・寶松院)
真野龍海(大本山清浄華院)
拙 博之(網代・教安寺)
水科善隆(長野・寛慶寺)
(敬称略・五十音順)

ホームページ <http://jodo.ne.jp>
メールアドレス hounen@jodo.ne.jp

写経と写詠歌セットのご案内

特徴① 奉書用紙の手本に**筆ペン**で**直接**なぞる

特徴② 法事や行事の**待ち時間**で**写せるA4判**

特徴③ 手本は**当会オリジナル**

特徴④ 「写経セット(全12枚)」は写し終えたと日常勤行の**経本**に。

特徴⑤ 「写詠歌セット(全5枚)」は**一首**ずつ**先祖供養**の為に。

従来の写経と異なる薄墨をなぞる写経と写詠歌のセットです。扱いやすいA4版で筆ペンで写せます。手軽にかつ短時間でできる新しいタイプの写経、写詠歌ですが、高級奉書を使用していますので、墨と毛筆でも写せます。法事や各種行事、詠唱会の待ち時間に、朝夕のお参りの前後に、新たな写経・写詠歌行事にご利用下さい。

申込日 年 月 日 教区 組 寺・院

御担当者名 電話 ()

御住所 〒

写経セット 関東版(三奉請)、関西版(四奉請)に丸をおつけ下さい。

①**写経10セット** 領価:12,000円(税込) 関東・関西 セット
※寺院名()を入れる・入れない

②**写経30セット** 領価:36,000円(税込) 関東・関西 セット
※寺院名()を入れる・入れない

写詠歌セット

③**写詠歌20セット** 定価:10,000円(税込) セット

④**写詠歌50セット** 定価:25,000円(税込) セット

※写経セットの寺院名入れは無料です。ご希望の場合は寺院名をお書き下さい。

※消費税と発送料は領価に含んでいます。商品お届け時の請求書にてお支払い下さい。

《ご注文をご記入の上、法然上人鑽仰会へFaxまたはご郵送下さい》

お檀家の皆様へ

写経 セット

浄土宗勤行の解説も付いた12枚組

毎日のお経だから
心のこもったオリジナルな
ものがいい。



薄墨手本をなぞる
オリジナルA4判

詠唱会
の
皆様へ

写詠歌 セット

浄土宗歌「月影」と春夏秋冬の和歌
解説付き5首セット



詠唱でお唱えする歌、
法然上人のお歌を
筆で写して心に刻もう！

当会オリジナル新商品!!

※詳細はウラ面へ

法然上人を心から慕う
法然上人鑽仰会だから
こそ作れる高級奉書の
オリジナル手本です。

法然上人鑽仰会 FAX : 03-3578-7036

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4明照会館4階

※お問い合わせは、Faxまたはメール

hounenn@jodo.ne.jp へお願いします。